

東アジアの文字と文献

併設展：最近の貴重書



会 期：平成3年11月14日(木)～11月22日(金)

(休館日：11月17日(日))

午前9時30分～午後4時30分

会 場：京都大学附属図書館展示ホール

ご挨拶

京都大学附属図書館では、毎年テーマを決めて、学外者にも公開する展示会を開催しています。

今秋は、「東アジアの文字と文献」というテーマを掲げ、本附属図書館所蔵のほか文学部、人文科学研究所および東南アジア研究センターのご協力を得て、御所蔵の貴重本を出品いただく運びになりました。各部局のご支援に対して厚くお礼申し上げます。

この展示会を一つの契機として、いまなお学内に埋もれる珍しい資料を発掘できるのではないかと念願しています。

今回は、出品名のみを列挙する目録ではなく、出品物の一つについて簡潔な解説をつけた展示目録を作成する試みをしてみました。

文字が人類最大の発明であったことは言うまでもありません。この発明の恩恵にあずかった民族だけが過去に独自の文明を築き上げることができました。

文字にも言葉と同じように系統があります。どの文字からどの文字が生まれたか、どの文字は独自に創作されたのかは、現在ほぼ正確にわかっています。そして言葉と同じように、文字も時代とともに、また伝播によって変化していきました。いまなお生き生きとして大いに活動し、つねに新しい情報を運んでいる文字から、すでに死滅して過去の情報のみを伝達する文字、中には何を伝達しているのかいまだに極秘にしている文字、種々様々で、その数は、東アジア地域に限っても、決して少なくはありません。

大雑把に言って、文字には大きい流れに沿って発展したもの、あるいは単発的にある契機で誕生したもの、まちまちですが、それぞれの民族は、自己の文字を造って記録を残しました。その記録は、後世それを研究する乃至は紹介する書物を生んでいきます。ここで文献と呼びましたのは、その二つの対象を含んでいます。

今回のような小規模の展示会では、到底全体を網羅的に提示することはできません。許される範囲内で可能な限り系統だって紹介するよう努めました。朝鮮および日本に関しましては主に分量の関係から今回はふれず、別の機会に取り上げたいと考えています。

今回の展示会の開催にあたり、文学部の永田英正教授、御牧克己助教授、吉本道雅氏、大江節子氏、そして言語学研究室の家本太郎氏にひとかたならぬご援助とご協力をいただきました。記して感謝いたします。

京都大学附属図書館長 西田 龍雄

東アジアの文字系統のあらまし

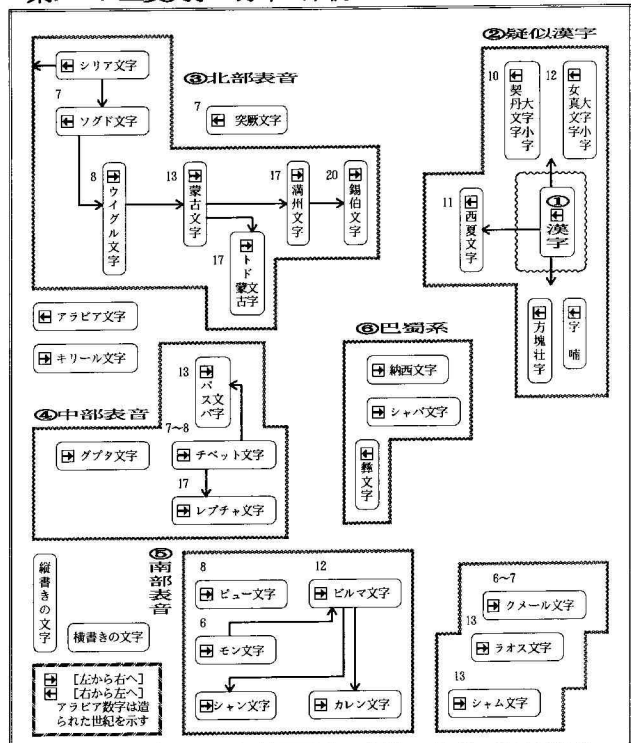
東アジア地域で主軸となる文字は、言うまでもなく漢字である。その起源の古さ、伝播範囲の広さは群を抜いて、偉大な文字文化圏を形成した。時代が10世紀になると、この漢字文化圏の内部で新興の独立国家が、漢字に似せた文字を造り出した。契丹・西夏・女真の文字がそれである。擬似漢字と呼ぶ。契丹大字のほかは、漢字の字形そのものよりも、造字の原理と文字の姿を模倣したが、いずれも数百年ほど経て、国家の滅亡と共に漸次使い手を失った。漢字文化圏の南方地域にいた壯族とヴェトナム族の民間では、別の型の擬似漢字が普及した。文章語として採用された漢字とは別に口語を記録する手段として、漢字の偏旁などをそのまま借りて、自国語に合わせて組み換え新文字を造る方法を考案した。それを字喃(チュノム)系文字と呼ぶ。

また漢字文化圏の西南地域には、唐代以降一群の象形文字を主体とする表意文字圏が出現する。納西(ナシ)、シャパ、彝(イ)文字の系統がそれで、後代一部は表音文字に転化したが、興味深い字形をいまなお保持している。秦以前にその地で使われた巴蜀(はしょく)の文字との関連を想定して、ここでは巴蜀系文字の名前で一括した。

漢字文化圏の周辺には、時代が7世紀以降になると、表音文字が導入されてくる。分布地域から北部表音文字、中部表音文字と南部表音文字に分類した。それらの文字の流れを遡るといずれもアラム文字に到達する。

シリア、ソグド、ウイグル、蒙古、満州、錫伯(シーボ)各文字の流れは明確であり、中部表音文字は、グプタから、チベット、バスバへと流れた。南部表音文字は、モン、ビルマ、カレン、シャンの一群と、クメール、ラオス、シャム(タイ)の一群からなる。これらの文字系統論にはなお問題を残すところがあるが、一つの源から流れていく道筋は、はっきりしている。右の図は、その流れと分布地域と時代を概念的に示したものである。展示品を置いていない文字も含まれる。(西田記)

東アジア主要文字の分布と系統



(1-1) 漢字：甲骨文

殷代、卜占に用いた亀甲・牛骨に刻した文字を甲骨文字といい、卜占の記録を甲骨文とか卜辞という。使用時期は紀元前1300年頃までさかのぼり、今日知られる漢字の最も古い形である。1899年に発見され、その後の解読と研究によって、かつては伝説の域を出なかった殷王朝の实在が確認された。甲骨文字約3000字のうち、半数が解読されている。

1-1-1 甲骨 B0848 第1期

ト旬すなわち癸（みずのと）の日に、次の甲（きのえ）の日から癸の日までの10日間の禍の有無を卜ったものである。旬のトいは各時期に共通して見られる基本的なトいである。右から2行目と5行目は「禍あり」と出ている。この甲骨文は最も古い時期に属し、文字は一刀彫りのような簡潔で力強さがある。人文科学研究所蔵

1-1-2 甲骨 S3113 第1期

狩猟の可否や、その間の安否を卜ったものである。ここには獲物については記されていないが、同類の他の甲骨文から推して奴隸狩りを卜ったものらしい。王族卜辞とよばれるもので、甲骨文の断代（編年）では第1期に属するとされる。文字は、B0848とは全く対照的で、当時一方ではこのような書体も行われていたことを示す。人文科学研究所蔵

1-1-3 甲骨 B2370 第4期

ト占は、牛の肩胛骨や亀の腹甲の裏面に先ず長い楕円形の凹み（鑿(サ)という)をうがち、その横に円形の凹み（鑽(サ)という)をほる。この鑽の部分に火をあて、表面に現れたひび割れの角度や長さなどによって吉凶を判断する。ト占が終わると、割れ目を避けて卜った内容が記される。この甲骨は主として降雨を卜ったもの。文字は第1期の簡潔な書体の伝統を継承しているが、力強さは見られない。人文科学研究所蔵

1-1-4 甲骨 B2896 第5期

ト旬の甲骨で、甲骨文では最も新しい時期すなわち殷の末期（紀元前11世紀初頃）に属する。文字は、きちんと整った中にふくらみをもち、流動的な美しい書体へと変化しており、同時期の金文の書体とも相い通じる。人文科学研究所蔵

1-1-5 亀甲

亀の腹甲のサンプル、現代の亀である。人文科学研究所蔵

1-1-6 『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』 貝塚茂樹・伊藤道治 著 1959・60・68年、京都大学人文科学研究所（研究書）

京都大学人文科学研究所には、上野精一氏、黒川幸七氏ら旧蔵の甲骨約3600片を所蔵している。本書は、その中で偽刻や無字のものなどを除いた残り3246片の甲骨について、時期別にト占の内容によって分類し、図版冊には全甲骨の拓本を収め、本文冊には各甲骨文について釈文、読み下し文に詳細な注を付している。また索引は甲骨文字の字書としての役割りも果たしている。日本の甲骨文字研究のすぐれた水準を示す出版物である。附属図書館蔵

(1-2) 漢字：金文

一般に金属器の銘文をいうが、重要なのは殷周時代の青銅器に鑄こまれた銘文である。殷の後期から現われる青銅器は、主に神や祖先の祭祀器として製作されたもので、金文には図象記号や作器者名、被祭者名だけを記した簡単なものから、製作の事情を記した長文のものまである。殷の金文は、直線で構成される甲骨文とは異なって、流麗な書体で表現されるが、西周に入るとしだいに生硬かつ形式的な傾向が顕著になってくる。

1-2-1 小子鬻卣(しょうしほうゆう) 殷後期

小子は殷王の一族でも遠縁のものをいう。銘文は、殷末の夷方征伐に際して鬻(ほう)は王子から宝貝を賜わり、功業を表彰されたことを記念して亡母の祀器を作ったことを記す。文字は優美で、かつ気品があり、殷の金文を代表する書体である。 人文科研考古資料#18481

1-2-2 刺卣(らつゆう) 西周前期

周初に多い短文銘と図象記号を組合せたもので、銘は「刺が兄日辛の祀器を作る」とある。書体は雄偉で、周初の若々しい王朝の意気込みが感じられる。なお図象記号は、亞字形の中に吹流しのついた旗と、その下に壬(みずのえ)と它(蛇)を表す。 人文科研考古資料#18278

1-2-3 泉戣卣(ろくしゅうゆう) 西周中期

銘文は、泉戣(ろくしゅう)が王の命令で淮水上流の淮夷征伐に大軍をひきいて出征するのに際し、王から功業を表彰され、宝貝を賜与されたことを記念して亡父の祀器を作ったことを記す。文字は初期のような力強さを失って小さくまとなり、平板な書風の傾向を示している。 人文科研考古資料#9758

1-2-4 克鼎(こくてい) 西周後期

銘文は、善夫克が王命を受けて成周(洛陽)の八師を監閲する職に就任したことを記念して、祖先の祀器を作ったことを記す。西周後期を代表する金文の一つで、整齊な書体のなかに篆体の趣を見ることができる。 人文科研考古資料#3425

1-2-5 禺邗王壺(ぐうかんおうこ) 春秋後期

銘は蓋の外縁にある。全19字の金文は難読を以て知られるが、白川静氏の説によると、呉王夫差と晋の定公が黄池(河南省封邱県)で会合したとき(前482)、呉王から贈られた金で趙鞅の介者が祀器を作ったと読む。文字は、線は細く字はたて長になり、東周時代の主として東方系の地方的特色を表している。 人文科研考古資料#17744

1-2-6 鈇(ほう) 戦国中期

鈇(ほう)は方形の壺で、台に刻銘がある。東周時代に入ると、金文は地方ごとに発達して文字はしだいに装飾的になっていくが、他方では広範囲に共通する簡便で実用的な書体も使用されはじめる。この刻銘はその例で、内容も書体にふさわしく、壺の容量、製造所名および使用場所名等を記すだけで、極めて実用的である。 人文科学研究所蔵

1-2-7 『两周金文辞大系』 郭沫若 著、1935年、文求堂、東京 (研究書)

中国古代史研究に大きな足跡を残した郭沫若の代表作の一つ。図録と考釈の2部から成る。郭沫若は本書において、銘文の記載とくに人物関係を中心にして青銅器の群別を試み、金文の断代研究にはじめて体系を与えた。今日では修正を要する部分もあるが、金文研究史上画期的な名著である。人文科学研究所蔵

(1-3) 漢字：篆書

小篆ともいう。西周時代の金文は時代とともに変化するが、これが東周時代すなわち春秋・戦国時代になると、政治上の分裂状態もあって各地域ごとに発達を遂げた。秦の始皇帝は、紀元前221年に天下を平定すると文字の統一をはかり、丞相の李斯は当時秦に伝わる書体（大篆とか籀(ちゅう)文という)を簡略化して文字を新しく制定した。これが小篆である。曲線の多いのがこの書体の特徴である。『説文解字』の親字にも用いられている。

1-3-1 「琅邪(ろうや)台石刻」秦 始皇28年(紀元前219) 52×73cm (拓本)

秦の始皇帝が全国を巡行した際に、天下統一を記念して各地に立てた石刻の一つ。碑の全文は『史記』に見えており、それによると始皇帝は28年に琅邪(山東省)に自らの頌徳碑を立て、ついで二世皇帝の元年(前209)に父の功績を称える詔勅が付け加えられた。現存するのは始皇帝時代の刻字の末尾二行の一部と、二世皇帝の詔勅の部分で、李斯の書とされている。人文科学研究所蔵

1-3-2 「袁安(えんあん)碑」後漢 元初4年(117)頃 73×139cm (拓本)

後漢時代前半期の気骨の政治家として有名な司徒袁安の墓碑。内容は官歴を列挙しただけで、故人の事績や功徳を称える文がなく、当時の他の墓碑と比べて異質の感がある。穿(せん)が碑の中央にあるのも珍しい。また漢代では篆書は碑の題額に残るだけで碑文に用いられる例は少ないが、書体はのびのびとして力強く、篆書漢碑の逸品である。碑文に和帝の諡(おくりな)の見えること、また碑の形状、書体、文体いずれも子の袁敞碑に似ているところから、袁敞碑と同時期に立てられたものと考えられる。人文科学研究所蔵

1-3-3 『唐写本説文解字残卷』 許慎 撰 (影印本)



『説文解字』は後漢の許慎によって永元12年(100)頃に完成した中国最古の部首別字書で、単に『説文』ともいう。15篇より成り、小篆文字9353字を540部に分類し、各字について字義を説明し、字形の構造と字音を示す。中国文字学史上画期的な大系的著作で、金文や甲骨文の解読など近世における中国の古代言語文字学の発展は、『説文』に負うところが大きい。陳列の本は、唐代の写本(木部残卷、全部で6紙)を民国時代に影印したものであるが、この原本は1926年に内藤湖南博士が入手し、現在は国宝として財団法人武田科学振興財団、杏雨書屋に所蔵されている。文学部蔵

(1-4) 漢字：隸書

篆書にたいして、文字を敏速に書く必要から生まれた実用的な書体である。その結果、篆書は皇帝など一部の使用に限られ、一方隸書は臣下の用いる書体として秦から漢にかけて発達し、普及した。隸書は漢代では碑刻に典型的に見られるように起筆と収筆に特色をもった八分（はっぶん）がつくられたが、魏晉時代に入り楷書へと移行する。なお草書は、隸書のくずし字として楷書の完成以前からすでにあった。

1-4-1 「乙瑛（おつえい）碑」 後漢 永興元年（153） 88×190cm（拓本）

桓帝の時代に、魯国の相の乙瑛の申請によって孔子廟に百石の卒史一人を置いて廟を守らせるに至った経緯を述べるとともに、乙瑛以下そのことに関係した人たちの功績を顕彰するために立てた碑。碑文は、乙瑛の申請書、中央の審議を経て皇帝が裁可した文書、実際の人選と任命に関する報告書の三種の公文書から成り、漢代文書研究資料としても重要である。碑は曲阜（山東省）の孔子廟に在り、漢碑隸書の中でも優れた一つに数えられている。人文科学研究所蔵

1-4-2 「曹全碑」 後漢 中平2年（185） 76×177cm（拓本）

現在の陝西省部（こう）陽県に立てられた、県令曹全の記念碑。曹全は敦煌の出身で、西域の疏勒（そろく）国（カシュガル）討伐で手柄をたてたのち、県令を歴任。黄巾の乱時には、郃県令となって県内の乱を平定し、荒廃した地方政治の再建に力を尽くした。その功績を称えたものである。碑の裏面には、碑を立てた官吏や地元民有志の姓名と寄付金額を刻す。高度に発達した隸書体の中に、楷書への移行が認められる。人文科学研究所蔵

1-4-3 「破胡燧（はこすい）等の兵釜禮簿（へいふがいは）（部分）」

後漢 永元5年(93)~7年(95)（パネル）

スウェン・ヘディンのひきいる西北科学考查団は、1930~31年にエチナ河流域（現内蒙古自治区）の漢代烽燧遺址で官文書を主とする約1万枚の簡牘を発見した。いわゆる居延漢簡である。これら簡牘の多くは編綴して使用するが、元の状態で出土することは極めて少ない。パネルはその珍しい一例で、77枚の中の最初と最後の部分を示す。内容は破胡燧等における兵器や日用器具などの備品の状態を3年間まとめたもの。居延漢簡の中では年代が一番新しく、書体は隸書をくずした草書体（章草という）で書かれている。

1-4-4 「燧長病書牒（すいちょうびょうしょちょう）」

後漢 建武3年(27)（複製品）

1972年に甘肅省博物館などを中心に組織された甘肅居延考古隊は、エチナ河流域を再調査し、73~74年にかけて約2万枚の居延漢簡を発見した。展示の簡牘は、同博物館が作った複製品である。内容は、右の2枚は城北燧長党から病気で任務につけない旨を上官の城北候長に提出した届け、左1枚はその届けを城北候長から上司の甲渠候官に送った送り状である。左の簡に見える別筆の文は甲渠候官での処理を記したもので、「都尉府に上申して医者に診せるようにした」とある。

1-4-5 『居延漢簡考釈』 勞幹 著、1943・44年、中央研究院歴史語言研究所、四川省南溪（研究書）

居延漢簡は1931年に北京に運ばれて解読の作業が始まったが、やがて日中戦争

のために作業は中断。戦火を避けて各地を転々としたすえ1943年に至り、勞幹（ろうかん）によって四川省南溪で釈文4冊、翌年に考証2冊が石印で公刊された。勞幹手書きの原稿で、部数は僅か300部であった。本書は1951年に、当時北京にあった今西春秋氏から京都大学人文科学研究所に送られてきたもので、これをテキストに森鹿三教授を中心とする日本の居延漢簡研究が始まった。人文科学研究所蔵

1-4-6 『居延漢簡の研究』 永田英正 著、1989年、同朋舎、京都（研究書）

本学文学部永田英正教授の著書。居延漢簡は発見以来すでに半世紀が経過し、その間には最初の解讀者である勞幹を筆頭に世界各国の研究者による多数の研究が発表されたが、そこには見るべき研究方法論はなかった。本書は、簡牘を古文書として扱い、簡牘古文書学の基礎をつくった研究として注目される。

(2-1) 疑似漢字：契丹文字

遼(AD.916-1125)の太祖耶律阿保機が920年に作成させた契丹大字と、のち弟耶律迭剌がウイグル人使者に学び、制定した(AD.924? 925?)契丹小字の2種がある。大字は字形が漢字と酷似する表意文字で、小字は表意字と表音原字を組み合わせた表意表音混合体である。近年多くの碑石が出土している。前後300年あまり使われたが、契丹語は死語となり、契丹文字は未解読のところが多い。縦書き、右から左に行を移す。

2-1-1 「チンギス汗聖旨牌」 1206～1227年頃

牌符はモンゴル帝国・元朝で使臣が駅伝を利用する際に携行した信任状である。この牌符は銅製で金めっきが施されており、正面には漢字で「天賜成吉思皇帝聖旨疾」とあり、背面には契丹文字が刻されている。文学部蔵

2-1-2 「北大王墓志」 契丹大字拓本 1041年

興宗重熙十年(1041)建立。蓋正面には漢字で「北大王墓志」とある。誌文は契丹文字で27行、783字が刻まれ、背面には漢字21行510字が刻まれる。この契丹文と漢文は内容が一致しない。1975年冬、内蒙古自治区赤峰市阿魯科爾沁旗昆都地方で出土。墓主は耶律万辛家世と判明しているが、契丹文は未解読。

2-1-3 『遼陵石刻集録』 金毓黻 著、1934年、国立奉天圖書館編纂（研究書）

興宗哀冊(1055)、仁懿皇后哀冊(1076)、道宗哀冊(1101)などの漢文、および契丹文の哀冊碑身の鮮明な拓本抄本20件を収録するほか、「郎君行記」などの資料も紹介した。羅振玉は漢文哀冊に、羅福成は契丹文哀冊にそれぞれ釈文と考証を与えた。契丹文字研究の第一の時期を代表する書物である。文学部蔵

2-1-4 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に關する考古學的調査報告』 田村實造・小林行雄 著、1953年、京都大学文学部（研究書）

契丹王朝の最盛期を作り上げた聖宗、興宗、道宗三代の陵墓（内蒙古自治区バリン左翼旗）即ち慶陵の學術調査が1939年に行われたが、本書はその研究報告書。第一巻では、三陵発見の経緯と壁畫、遺跡、遺物の解説、漢文哀冊の詳解、契丹文哀冊の研究が収録され、第二巻には、原色版を交えた豊富な図版が収められている。契丹文字研究の第二の時期の成果を代表する。附属図書館蔵

2-1-5 『契丹小字研究』 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝林・邢復礼 著、
1985年、中国社会科学出版社、北京（研究書）

内蒙古大学の蒙古語文研究室と中国社会科学院民族研究所の契丹文字研究班が共同研究の成果をまとめた書。従来の諸研究を総合した形で、契丹小字の全ての原字にコードを与えている。33葉の図版がつく。原資料の解説と研究文献の詳細な解題があり、契丹文字研究史上第三の時期を画する貢献として評価されている。

(2-2) 疑似漢字：西夏文字

西夏国(AD. 1038-1227)の国定文字。国主李元昊が大臣野利仁栄に命じ考案させ、1036年に公布した。6133字ある。漢字の造字原理に倣い、独自の字形を創造した。単体字と合体字からなり、後者には、西夏人の独特の思考法を反映した会意字が多い。西夏滅亡後も使われ、明代初期に属する碑文もある。

2-2-1 「涼州感應塔碑文」 天祐民安5年(1094)（拓本）

涼州護國寺にある感應塔の修築に因み、その縁起を記録した碑文。西夏文と漢文が刻まれており、現存する数少ない西夏文字碑文の一つとして知られている。碑陰にあたる西夏文は全体で28行からなり、西夏語研究の重要な資料で、1961年3月、中国国務院によって、第一批全国重点文物保护单位に指定された。現在は、甘肅省武威県博物館に蔵されている。人文科学研究所蔵

2-2-2 「西夏王陵碑」 残石（拓本）

寧夏、賀蘭山の東麓に西夏陵園があり、九基の王陵が並んでいる。その中、2号陵が1975年に発掘され、碑亭を調査したところ、細かい碑文残石が出土した。篆書の西夏字の碑額も発見され、「大白上国護城、聖徳至懿皇帝寿陵誌文」と解説された。2号陵は寿陵即ち仁宗の陵墓であることが判明した。陪葬の108号墓梁国正献王嵬名安惠碑の残石中、やや大きい2片の拓本である。

2-2-3 『番漢合時掌中珠』（写真）

1190年に西夏人骨勒茂才が編集した西夏語と漢語の対訳学習書で、37葉からなる蝴蝶装の小冊子。1908年にコズロフがハラホトから将来した品より、翌年イワノフが発見し紹介した。全部で6種類の違った刊本が残っていて、その中の1本が完本に近い。原本はレニングラードの東方学研究所に蔵されている。羅福成の翻刻本(1924)のほか、最近、史金波等によって整理され索引をつけた翻刻本(1989)も出ている。

2-2-4 『大方廣佛華嚴經』（木活字本）

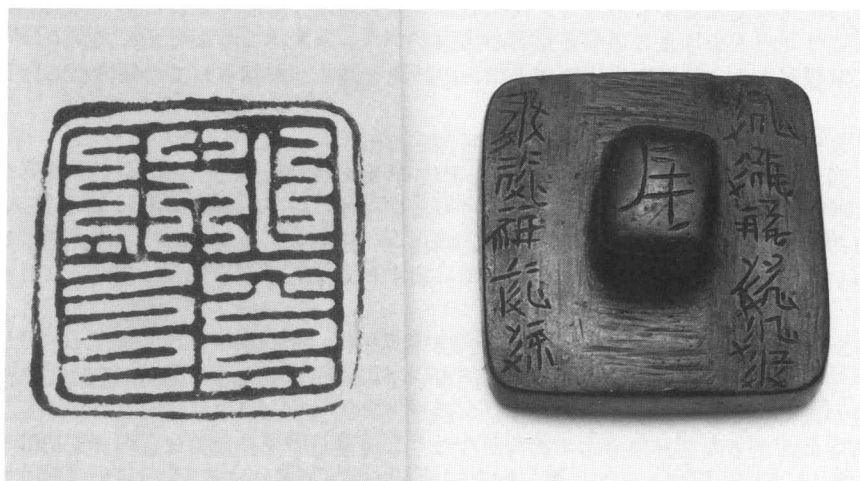
本華嚴經は漢訳八十卷本『華嚴經』より訳されたもので、河西刻本をもとに作られた元代刊本をさらに木活字で印刷した末期の資料である。本学には巻一から巻十および巻三十六が所蔵される。全文は西田龍雄教授によって研究されている。（『西夏文華嚴經』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、1975・76・77年、京都大学文学部刊）文学部蔵

2-2-5 西夏印章‘首領’（銅製）

西夏文の印章は大小さまざまな形があり、現在100点ほど発見されている。印面は篆書で大体同じく‘首領’と読まれる。印背には通常右側に年号、左側に所有者名が刻まれ、印紐上部には‘上’の字がある。右の印には元徳丁未九年(1127)、左の印には大徳二年(1136)の年号がある。右の印面は‘首領’、左の印面は不詳。

1982年に『西夏官印彙考』（羅福頤等）が刊行され、97印が収録されるが、この印方2点ともその中には含まれていない。 文学部蔵

写真 2-2-5 西夏印章‘首領’



2-2-6 「コンピュータ出力の西夏文字」 1976年（パネル）

パネルは、コンピュータから出力された西夏文字を写真焼付けしたものである。『同音』を原版として、5777文字をイメージ入力し、編集の上で一文字を64×64点の大きさに縮小している。本学文学部西田龍雄教授と工学部長尾真教授の共同研究の成果である。コンピュータが普及していない時代の、人文科学分野における数少ない電子技術導入の一つといえる。

2-2-7 *L'Écriture du Royaume de Si-hia ou Tangout*, M. Devéria, 1898, Imprimerie Nationale, Paris. (ドゥベリア『西夏王国文字考』)

西夏文字がヨーロッパの学界に紹介されたのは、ワイリーが1870年に発表した居庸関刻文の研究によってである。当時不明文字として扱われ、ワイリー自身は女真文字と考えていた。ドゥベリアは、1882年に河南省宴台で真実の女真文字を発見して、居庸関の不詳文字は西夏文字に違いないと確信した。本論文は、西夏文字の名で呼んだ最初のものである。 文学部蔵

(2-3) 疑似漢字：女真文字

女真・金(AD.1115-1234)の太祖阿骨打が完顔希尹に命じ、漢字と契丹文字を模倣して制成させた女真大字(天輔3年(1119)に公布)と、熙宗完顔亶が制作し、天眷元年(1138)に公布した女真小字がある。ほぼ200年使われたが、明代中期に死滅する。縦書き、右から左に行を移す。

2-3-1 「西安碑林発見女真字文書」 (写真)

陝西省文物管理委員会が西安の碑林にある「石台孝経」碑を修理した際に発見された女真文書の残片。1973年に羅福頤によって、金代女真文字抄本と鑑定されたが、不鮮明で判読が容易ではないため、まだよく研究されていない。11枚の断片合わせて、237行、2300余りの女真文字が記されている。

2-3-2 『女真館譯語』 「雑字」「來文」 (乙種本、写真)

永樂5年(1407)、四夷館に女真館が設立され、漢語と女真語を対訳にした『雑字』と例文集『來文』が編纂された。『雑字』には女真語の意味と発音が漢字で示され、『來文』には、東北各衛から明朝に進貢した上奏文が採録されている。世界各地に数種類の写本があり、女真語女真文字研究のもっとも基本的な資料になっている。 附属図書館蔵

2-3-3 Die Sprache und Schrift der Jučen, Wilhelm Grube, 1896,
Kommissions-Verlag von O.Harrassowitz, Leipzig.
(グルーベ『女真言語文字考』) (研究書)

本書は、『女真館譯語』および女真文字研究の嚆矢である。内容は 1. 雑字(女真語・漢語対訳単語集)原文の転記、2. 表音漢字をつけた女真文字の画引、3. 表音漢字を女真文字につけて漢語の発音順に並べた索引、4. 女真語・ドイツ語対訳語彙、5. 來文(文例集)20通の転記とローマ字表音およびドイツ語訳に分かれる。 文学部蔵

2-3-4 『女真語言文字研究』 金光平、金啓琮 著、1980年、文物出版社、北京
(研究書)

女真語の位置、女真文字創制と普及状況からはじめ、資料と論著を紹介、女真文字の構造と読み方、そして文法を述べる。最後に歴史研究に対する貢献にふれている好著。付録として、5種の碑文の解説がつく。 文学部蔵

2-3-5 『女真文辞典』 金啓琮 編著、1984年、文物出版社、北京 (研究書)

女真文字を編著者の設定した部首により配列し、全部で正体字300字が集録される。各文字ごとに数多くの異体字をあげ、それぞれの発音、意味、用例を示した辞書。部首は、たとえば一類一部、フ部、十部など五類38部に分ける。字源として関連ある漢字、契丹字をあげたのも特徴で、現在まで刊行された女真文字を対象とした書物の中で、もっとも豊富な情報を伝える。付録として、助詞、助動詞表と論文一覧がつく。

2-3-6 The Sino-Jurchen Vocabulary of the Bureau of Interpreters,
Daniel Kane, 1989, Indiana University.
(ケイン『女真館訳語漢語女真語語彙』) (研究書)

いわゆる丙種本『女真館訳語』の最近の研究書である。女真語女真文字の研究史と研究資料を解説し、通訳官が使ったと考えられる、漢語と漢字で表音した女真語を対訳した単語集(阿波国文庫本)を対象に、各項目ごとに女真語形を復元している。

(2-4) 疑似漢字：字喃(チュノム)

ヴェトナム口語の表記に使われた派生漢字で、漢字の字形をそのまま仮借(かしゃ)したものから、漢字の要素をヴェトナム語に合わせて組み換え新字形を造るなど若干の原則にしたがって構成される。例えば、𠵼‘三’は、発音 ba ‘巴’を偏に、意味‘三’を傍に示した字喃である。

2-4-1 「チュノム経典」 (写本)

字喃で書かれた書物には、『大南国史演歌』をはじめ歴史長篇叙事詩が多いが、

詔勅や公文書のほかに佛教関係の書もある。本写本もその一つで、タイ国で発見されたものらしく、ところどころよみ方をタイ文字で鉛筆書きしている。 東南アジア研究センター蔵

2-4-2 『大南國音字彙合解大法國音 Dictionnaire Annamite-Français (Langue officielle et langue vulgaire) - I, II』 Jean Bonet, 1899-1900, Imprimerie Nationale, Paris. (ボネ『安南語・フランス語字典』)

有名なローデ(AI. de Rhodès)の『越葡羅辞典』(1651 ローマ)が、ヴェトナム語のもっとも古い辞典として知られるが、のち本書まで数点の辞典が出ている。はじめに簡単な文法があり、各見出し語は、国語ローマ字であげ、すべてに漢字または字喃をつけている。かなり整った辞典で、カールグレンも唐代漢字音研究に本書を利用している。字喃表記はいまでも意義がある。 文学部蔵

(2-5) 疑似漢字：壮(チュアン)文字

壮族が六書の造字法をまね、漢字の偏、傍などをそのまま借りて造り出した文字。ラテン文字に対して、方塊壮字とも呼ぶ。字喃系文字で、唐代に創作されたと言う。この文字の摩崖石刻もある。

2-5-1 『Sawndip Sawdenj 古壮字字典(初稿)』 広西壮族自治区少数民族、古籍整理出版規劃領導小組主編、1989年、広西民族出版社 (研究書)

方塊壮字は民間で流行し、神話、伝説、歌謡、薬方などの文献が残っており、今でも使っている地域がある。漢字とは関係なしに考案した少数の象形文字を除いて、会意字𠂔(上)と形声字𠂔din'(足)、𠂔sai'(男)などが主流を占める。本書は古壮字を集成したはじめての字典である。

(3-1) 北方表音：シリア文字

3つの書体があり、右から左に読まれる。キリスト教化以前に使われたエストランゲロ(円形)書体のほか、3世紀以後、エデッサを中心とするキリスト教徒の西方言はセルトー(線状)書体で、東方言はネストリアン書体で書かれる。

3-1-1 Christlich-Palästinische Fragmente aus der Omajjaden-Moschee zu Damaskus, Friedrich Schulthess, 1971, repr., PARITAS(The Israel Project For University Libraries), Jerusalem. (シュルテス編『ダマスカスのウマイヤ・モスク出土 パレスティナ・キリスト教徒アラム語断片集』)

これらの断片は、1900年、聖ヨハネ教会を転用した現存最古のウマイヤ・モスクから発見された。シリア・パレスティナ・アラム語であるが、本書ではエストランゲロ書体シリア文字で印刷されている。開頁は『創世記』部分。シリア語が死語となった後も、シリア文字はネストリウス派キリスト教徒によって使用され、今日に至る。 文学部蔵

3-1-2 大秦景教流行中国碑 唐 建中2年(781) 141×233.5cm (拓本)

唐初中国に伝来、流行した景教(ネストリウス派キリスト教)の簡単な教義と、その盛衰を記した記念碑。碑の正面下部に、781年バルフ出身のYezdbuzidが碑を建立した旨、左右側面には伝導僧及びその僧職名がエストランゲロ書体のシリア文字と漢字を併記して刻まれている。 文学部蔵 原碑は陝西省博物館内の碑林

に収蔵。レプリカは京都大学博物館一階に置かれている。

3-1-3 kəṭābā d-'Ewangelīyōn qaddīšā d-māran Yešū' Məšīxā,
'a(y)k da-b- 'edatā d-Mawṣil Metqārē, 1829, London. (『主イエス・
キリストの聖なる福音書 —モスルのキリスト教徒の読みで—』)

ネストリアン書体シリア文字による古典シリア語の最初の印刷本。13世紀にシリア語は死滅したと考えられたが、1820年代にクルディスタンでネストリウス派の存在が確認され、英国人ウォルフはそこでシリア語新訳聖書の写本を入手した。本書は、その写本を基に、英国聖書教会がネストリアン書体の活字を作りロンドンで印刷したものである。本来のネストリアン体は角ばっているが、本書の活字は、ヨーロッパで印刷されていたセルト一体の影響で少し丸みを帯び、母音点が極めて少ない。

3-1-4 Chronique de Michel le Syrien, J.-B. Chabot, 4 parts. repr., 1963,
Culture et Civilisation, Bruxelles.

(シャボ『シリアのミカエル年代記』) (研究書) (4巻目がテキスト版)

アンティオキアのヤコブ派総主教大ミカエル(在位1116-1199)による年代記。エデッサのヤコブ派教会に唯一残っているシリア語写本を、シャボがフランス語訳を付して複製したものである。セルト一書体古典シリア語で書かれている。判別点のみで、母音点は付されていない。なお、セルト一体シリア文字は、ポリグロット『聖書』のために早くから印刷されていた。文学部蔵

(3-2) 北部表音：突厥文字

AD.7世紀から10世紀にかけて突厥族のほか、ウイグル人もキルギス人も使っていた。北歐ルーン文字と酷似するので、テュルク・ルーン文字とも呼ばれる。38乃至40の字母があり、音素・音節混用文字である。右から左に読まれるが、牛耕式もある。広い範囲の地域で碑文・写本が出土している。

3-2-1 『闕特勤(きゅるてぎん)碑』唐 開元20年(732) 125×292.5cm (拓本)

復興突厥の第3代君主ビルゲ・カガンが弟キュル・テギン(kül tegin ?-732, 湖のように聡明な王子の意)の功績を記念して建てた碑。四辺の角を削った形の八面の碑身には、西面にある唐の玄宗皇帝の御筆御書の漢文と北西角を除いた、他の六面には突厥文字によって古代テュルク文が刻まれる。これは東面の拓本である。1889年ロシアのヤドリツェフがオルホン河畔で発見し、未知の文字として脚光をあびたが、1893年、デンマークのトムセンによって解読された。文学部蔵

3-2-2 Памятники Древнетюркской
Письменности, С.Е. Малов, 1951,
Издательство Академии Наука СССР,
Москва и Ленинград.

(マーロフ『古代テュルク語碑文』) (研究書)

ロシアにおけるテュルク学の輝ける伝統を継承したマーロフによる著作。キュル・テギン碑文、トニユクク碑文(テュルク語最古の碑文)、エニセイ碑文などを含む突厥文字碑文とウイグル文字、アラビア文字によって記された古代テュルク語を収める。各碑文の発見場所、形状を述べ、キリル文字による転写、翻訳、

訳注と巻末に語彙集を付す。

3-2-3 Памятники Древнетюркской

Письменности Монголии и Киргизии,
С.Е. Малов, 1959, Издательство Академии
Наука СССР, Москва и Ленинград.
(マーロフ『モンゴルおよびキルギスにおける古代テュルク語碑文』)
(研究書)

マーロフ、S. E. (1951) の続編、補遺。モンゴルにあったオンギン碑文、
キュリチャル碑文など (AD.7-8C)、キルギスの突厥文字碑文 (AD.5-8C)、シ
リア文字碑文 (AD.13-4C) が収められる。 文学部蔵

3-2-4 『突厥文古い書』 (写本、写真)

今世紀の初め頃、新疆ミラーンと甘肅敦煌で突厥文写本が発見された。千佛洞
将来のスタイン収集品から、トムセンが最初に紹介した占ト書がこれである。小
型の冊子体で、保存がよく、上質の中国紙に美しい書体で書かれている。全体で
58葉。おそらく9世紀初頭の作とされる。短文の形で簡潔に表現し、各文ごとに吉
凶の判断がつく。夢判断であるらしい。 文学部蔵

(3-3) 北部表音：ソグド文字

右から左に読む表音文字 (子音字のみ) で、中央アジアと中国西北地域で使わ
れた。書簡体、写経体、草書体があり、草書体がウイグル文字に伝承された。

3-3-1 『守屋孝蔵氏蒐集古経図録』 1964年、京都国立博物館

京都市在住の弁護士守屋孝蔵氏から京都国立博物館に寄贈された古写経中にく
まれる。日本に将来された数少ないソグド語写本の一つで、『大智度論第八巻』
(重文) の紙背に書かれ、内容はマニ教関係の文献であることが判明している。
附属図書館蔵

3-3-2 The Buddhist Sogdian Texts of the British Library, D.N. Mackenzie, 1976, Leiden.(マッケンジー『英国図書館所蔵ソグド文佛典』)(研究書)

1907年、A.スタインが敦煌千佛洞から将来したスタイン・コレクションには、
ウイグル文がかなり含まれている。本書はその中、6種の仏典断片を取り上げ、原
文の転写英訳と詳しい注記のほか、付録として、漢(梵)ソグド佛教語彙と、6種
佛典断片のファクシミリがついている。

(3-4) 北部表音：ウイグル文字

当初は横書きで、のち90度回転して縦書き、右から左に移行する形になった。
楷書体と草書体がある。唐代から明代にかけて主にトルファン盆地で使われた。
字の数は時代によって増減する。文献は、仏教、マニ教、景教の経典をはじめ、
医学、文学作品、契約文書、碑文など甚だ多い。17世紀頃まで使われたと言われ
る。

3-4-1 『ウイグル文マニ教徒祈願文』 9世紀中葉以降

ウイグル人は8世紀中葉、モンゴル高原を制し、その多くがマニ教に改宗したが、
9世紀中葉、キルギス人の圧迫を受け中央アジア各地に移動した。これは吐魯番

(トゥルファン) 付近から出土した文書の断簡で、9世紀以降に属する。朱による注で墨との装飾的コントラストをみせる技法が用いられている。文学部蔵

3-4-2 『ウイグル文菩薩大唐三蔵法師伝』 1951年、北京 (写本影印本)

漢文『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』から翻訳され、古代ウイグル語散文の典型と言われる。初期ウイグル写経体で書かれた10-11世紀の写本で、分量の多い文献の一つ。1930年頃新疆トゥルファン地区から出土したが、大部分が北京図書館に収められたほか一部は海外に持ち出された。1951年に北京のものとフランスのアカン教授のものを影印出版したのが本書である。

3-4-3 『古代維吾爾史詩 — 烏古斯可汗伝説』 (『オグズ・ナーマ (オグズ=カガン説話)』)、1980年、民族出版社、北京

テュルク系の一部族オグズを擬人化したオグズ・カガンを主人公とする一種の英雄説話。著者・成立年代などは明らかではないが、蒙古語よりの借用語を含むことから13世紀以降の作と推定される。ウイグル文字による一写本のみが知られている。本書はそれを現行ウイグル文(アラビア系文字とラテン系文字)で表記している。

(3-5) 北部表音：モンゴル、パスバ文字

モンゴル文字：モンゴル人がウイグル字形を借用し、13世紀、チンギス汗の時代に作成した表音文字。17世紀になって、二つに分かれ発展する。一つは現行の蒙古文字、もう一つは新疆オイラート族が改良したトド蒙古文字である。縦書き、左から右へ移行する。

パスバ文字：チベット高僧パスバ(八思巴)がチベット文字をもとに、モンゴル帝国内の諸民族が使える世界文字として考案したもので、至元6年(1269)に公布された。縦書き、左から右へ移行する。約百年間使われたが、元の滅亡とともにすたれた。現在なお印章に刻まれている。

なお、キリール文字をもとにした表音文字が造られ、モンゴル人民共和国で使われている。

3-5-1 「成吉思汗石」 1225年 (拓本)

本学名誉教授梅原末治博士がロシア留学中に自ら拓出したもので、おそらく現存する唯一の拓本である。1225年に建立された最古の蒙古語資料として重視されている。チンギス汗が、トルケスタンのムスリムと一戦を決意し、勇猛善射の戦士を集め、弓の競技大会を開いた際、弟の次子エスゲ(Esge)が335歩(約558m)の距離から見事に矢を当てた。その武功をウイグル文字をもって記録し賞賛したものの、5行からなる原碑はレニングラードのエルミタージュ博物館に蔵されている。

文学部蔵

3-5-2 『元朝秘史』 葉德輝本 (板本)

蒙古語名 Monggol-un ni'ucha tobcha'an 『モンゴルの秘密の歴史』、編著者不明。正集10巻、続集2巻から成る。別に15巻本がある。

原典は早く失われ漢字音訳本(著者不詳、成書年に諸説あり、定説はない)のみが現存する。モンゴル族の起源説話から説き起こし、各部族の起源・出自を述べ、太宗の死の前年迄を記述する。13世紀の蒙古研究には不可欠の資料。現行本は、漢字音により中期蒙古語を写し、その右に直訳を施し、節ごとに大意を記す

体裁をとっている。 文学部蔵

3-5-3 『蒙古字韻』 編者未詳 1269-1292成書? (影印本)

元代にパスパ文字をもとに、漢字を検索した韻書。元代漢語を15韻目に分け、さらに声類の順に排列した漢語音節をパスパ字によって上方に書き、その下に同音の漢字を並べたもの。パスパ文字および元代漢語音研究にもっとも重要な資料である。現在元刊本は散佚し、朱宗文の校訂本の抄本が英国図書館に残る。上下2巻。本書は石浜純太郎教授将来の写真を影印したもの。

3-5-4 『元大徳十一年聖旨碑』 元 大徳11年(1307) 76×208cm

『加封孔子制詔碑』とも称す。元朝第3代皇帝武宗ハイシャンは、孔子を尊崇し、その封号を「大成至聖文宣王」と加号する旨の詔(起草者は閻復)を発し、中国全土の路府州県の孔子廟に建碑させた。この碑は儒教の本山ともいふべき、孔子の生地曲阜、孔子廟の大成門外に現存する。漢字の発音を一字ずつパスパ文字で音写している。 文学部蔵

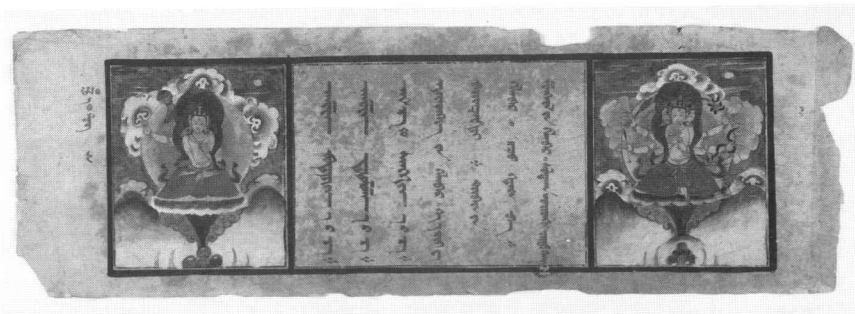
3-5-5 『蒙古源流』 内蒙古人民出版社 1962年(箱入300部限定) 1662年成書

原書名は『諸汗の源の宝の史綱(宝贝史綱) *Qadun-ündüsün-ü erdeni-yin to bchi*』。オールドス貴族サナン・チェチェンが、モンゴル建国より16世紀中葉にいたる歴史を、蒙古文字で書いた編年史。蒙古の歴史、文学、仏教史の研究にとって重要な資料である。『元朝秘史』『蒙古黄金史』と並んで蒙古族三大史書の一つと呼ばれている。乾隆年代に満州語に訳され、満州語から漢語に訳された。本書は成書三百年を記念して、内蒙古語言文学研究所などが刊行したもので、オールドスから将来した6種の手写本の中から新出の17世紀の抄本が選ばれている。

3-5-6 『モンゴル大蔵経』(テンギユル) (写本)

モンゴルにおける訳経は14世紀に始まるが、大蔵経の集成は、これより数百年後、清朝統治の時代に行われた。「カンギユル」(経量部)の写本が1718年、康熙帝の命により木版で開版され、従来の訳文を改訂し、印行された。「テンギユル」(論疏部)の写本が集成印行されたのは、更に後の1748年、乾隆帝の時代である。展示したのは「テンギユル」阿毘達磨部に属する『因施設』(施設論:kāraṇa-prajñapti)の蒙古語訳写本である。 附属図書館蔵

写真 3-5-6 『モンゴル大蔵経』



3-5-7 「パスパ字印章」(銅製)

元代の官印は、数少ないわけではないが、大部分がパスパ文字で刻まれている。

ただ、楷書体パスパ字ではなく、漢字の篆書にあたる書体を使っているため、なかなか判読し難い。 文学部蔵

3-5-8 『回鶻（ういぐる）式蒙古文文献彙編』 道布 編（蒙古文）、1983年、民族出版社、北京

「チンギス汗石」以降、『華夷譯語』に至るまで、主だった蒙古文字文献を取り上げ、原資料を写真で示し、内容を現代蒙古字で転写した研究書。注釈があり蒙古語研究者にとって簡便で有用な書物となっている。

3-5-9 『蒙文和托忒蒙文対照 蒙語辞典』 1979年、新疆人民出版社

オイラート人ジャヤ・バンディタがオイラート方言をもとに、1648年に改良したのがトド蒙古字で、トドとは‘明確な’の意味である。31字母からなる。本書は蒙古文語の綴字を上段に、トド蒙古文綴字を下段に対照した辞書である。

3-5-10 「キリール文字蒙古語資料」

キリール字（ロシア文字）をもとに造ったキリール蒙古字は、モンゴル人民共和国で普及しているが、中国内蒙古自治区でも、1950年代の終わり頃使われたことがある。展示の2点がそれである。

（3-6）北部表音：満州文字

万暦27年(1599)、蒙古文字を基に造った無圏点満文と、天聰6年(1632)、ダハイ（達海）が改定した有圏点（新満州文字）満文がある。後者は38字母からなる。縦書き、左から右へ移行する。

3-6-1 『満州実録』 后金天聰9年(1685)成書（影印本）

清の太祖ヌルハチの実録八冊。満州族発祥伝説からヌルハチ一代の記録に至る。ひいては女真族に関する最重要資料。編者は不詳。満州語・漢語・蒙古語の3種の言語で書かれている。絵図は87葉に及ぶ。天聰9年(1635)に作成された重修太祖実録戦図を基に乾隆46年(1781)に成立したと考えられている。

3-6-2 『康熙誥命（こうきこうめい）』 康熙14年(1676)

清代、爵位を与える際の文書を誥命、勅命という。これは、満州人仏保(Fuboo)の亡き祖父母、達喇木(Dalame)、瓜爾佳(Gūwalgiyan)氏を封ずる誥命である。江寧織造（南京の官営織物工場）で織られた五色紵絲に満文と漢文によって記されている。 文学部蔵

3-6-3 『御製繙譯四書』 乾隆20年(1755)（板本）

別称を『滿漢合璧四書』という。「大学」「中庸章句序」「中庸」「論語序説」「論語上・下」「孟子序説」「孟子上・下」即ち、新安の朱熹による『四書章句集注』の序と本文を原本として、満州語に訳し、御製の二字を付けたもの。漢語からの直訳で、満州語本来の形式から乖離しているところもあるが、満州人においても必読の書とされた。 文学部蔵

3-6-4 Alphabet Mantchu, 3rd ed., L.Langlès, 1807, Imprimerie Impériale, Paris.（初版は1787）（ラングレ『満州文字考』）

本書の内容と成立についてはきびしい批判があるが、満州文字を活字にして印

刷した最初の書物である。はじめに、満州研究資料、満州族族源考、満州国の正確な年代記などの短い解説がある。 文学部蔵

(3-7) 北部表音：錫伯（シーボ）文字

満州文字の改良型。中国新疆伊犁哈薩克自治州錫伯自治県などで話される錫伯語の口語を表記するのに適するよう改めた。40字母からなり、縦書き、左から右に移行する。

3-7-1 『錫伯（満）語詞典』 佟玉泉ほか整理、1987年、新疆人民出版社

錫伯族は、もともとは満州族で満州語の方言を話したが、18世紀に東北地域から新疆に移動し、漸次独立の言語を形成した。この辞典は、現在の時点でもっとも整った内容をもっている。錫伯族の人口は17万3千人(1990)。

3-7-2 『錫伯文化』 (現代の雑誌)

1947年、錫伯族の言語研究者が満州文字の字形を改変して、錫伯文字を造った。音節末のqとkを一字にするなど字母の増減と、, : などの句読点の採用に満州文字との差異が見られる。小学校で錫伯文を教え、各種の図書新聞を刊行している。『錫伯文化』は、毎年2回出る。

(4-1) 中部表音：チベット文字

吐蕃(チベット)の英主ソンツェン・ガンボが、トンミ・サンブホータをインドに派遣し、作成させた(AD.632?,639?)と伝えられる。有頭字(楷書体)と無頭字(行書体・草書体)がある。8世紀以降、広範な地域で用いられた。インドのグプタ文字を起源とする説が有力である。

4-1-1 『敦煌本無量寿宗要經』 9世紀前半 (写本)

敦煌千佛洞で発見されたチベット文無量寿宗要經写本。当時、敦煌は、チベット高原を統一した吐蕃(7~9世紀)の支配下にあった。末尾には、写經生bZang kongの署名がある。 文学部蔵

4-1-2 『西番館訳語』 (板本)

永楽5年(1407)、四夷館に西番館が設立され、チベット語と漢語の対訳単語集が編まれた(雑字)。おそらくアムド地方の一種の共通語であるこのチベット語は、文語に極めて近い古形式を保持し、チベット語の歴史・比較研究にとって貴重な文献。抄本は各国に所蔵されるが、本書は後年木版刷されたもの。西番館と暹羅館のみがある。 文学部蔵

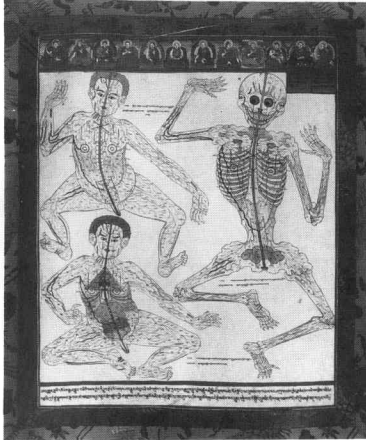
4-1-3 『チベット大蔵經』 (板本)

新ナルタン版大蔵經。第7世ダライラマ・ケルサンギャムツォ(1708-57)の命を受けて、ボラネ・ソナムトブゲ(1689-1747)が、カンギェル(101巻)を1730-32年に、テンギェル(224巻)を1741-42年に開版した。旧ナルタン大蔵經は14世紀初めの写本であったが、現在は散逸しているため、このナルタン版は重視されている。 附属図書館蔵

4-1-4 『聖八千般若般羅密經』 成来 編輯、1985年、青海民族出版社、西寧(活字本)

チベット経典は、いまなお各寺院に所蔵される古い板木によって刷り上げられている。近年、冊子体活字本が普及し、各種の古典的文献が活字によって再現されていく傾向の中で、古い体裁を保ちながら、活字を使った活版刷りの経典も出現した。

4-1-5 『四部医典タンカ全集』 1986年、西藏人民出版社、拉薩



チベット医学の原典（ギューシ）を研究し、1688年に60幅のタンカの形でまとめたものの解説書。医学基礎理論、人体の骨格・脈絡と生理機能、疾病の診断と治療をはじめ、薬学の理論と用薬の原則、医療器具など、多彩な内容を系統的に解説している。チベット文化の一端を示す絶品。

なお『四部医典』の翻訳およびその研究書は、近年多種類世に出ている。

4-1-6 『梵蔵漢対照詞典』 安世興 編著、1991年、民族出版社、北京（研究書）

梵文佛典の翻訳を契機として、チベット書写語は発展した。梵語と蔵語の対訳がチベット語辞典の原形と言える。『翻訳名義大集』（マハーヴェットパッティ）はその集大成であった。本書は極く最近刊行された辞典で、伝統的な梵蔵辞典の排列法にしたがい、梵語もチベット文字で示されて、チベット訳経の通読に便宜を与えている。梵語約2万5千語を収録する。

（5-1）南部表音：モン文字、ビルマ文字

モン文字とそれから造られたビルマ文字は、インドの南方ブラーフミー系のテルグ・カンナダ文字に由来すると言われる。6世紀以降多くの碑文を残すモン文字は、現在なお使われており、やや複雑な形態を保存する。それに比べてビルマ文字は、11世紀はじめに造られた。当初は角ばった字形であったが、現在は丸みの特徴的な字形を具えている。後代カレン文字（スゴカレンとポーカレン）とシャン文字がビルマ字から派生した。いずれも左から右への横書きである。ミャゼディン碑文(AD. 1112)がビルマ語最古の資料。

5-1-1 Epigraphia Birmanica, edited by Chas. Duroiselle, 1923, Rangoon.
(ドロワゼル編『ビルマ碑銘集』)

古代モン語（6～13世紀）と中期モン語（13～16世紀）は、末尾音-sが-hに変わる時期13世紀中頃に境界を置いている。その碑文は多種類残るが、本書はそれらを体系的に収集して有用である。

5-1-2 Inscriptions of Burma, Oxford Univ. Press（『ビルマ碑文集』）

フランス・アカデミーの出したクメール碑文集にならって、ラングーン大学が計画し刊行したビルマ碑文集。その巻Ⅰと巻Ⅱである。主にバガン王朝中期(AD.

1131-)から約一世紀にわたる碑文の拓本が厳選され、巻Iだけで100点を越える図版としてコロタイプで複製されている。印面は鮮明で利用し易い。ビルマ古代史の研究資料として、また言語研究の材料として価値は大きい。

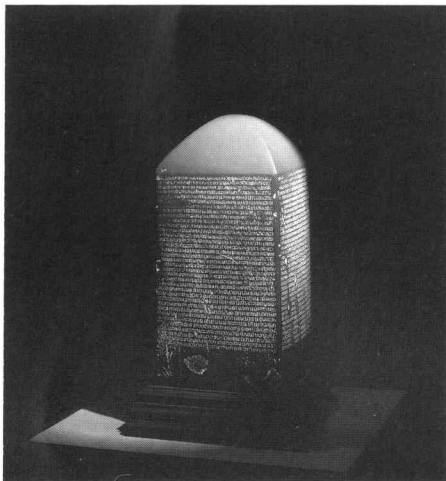
5-1-3 『スゴ・カレン語聖書』

カレン文字は、一見してビルマ文字の派生形であることがわかるが、字形は同じでも音価が異なるところが少なくない。たとえばビルマ文字で *pya* と読むのに、カレン文字では *pla* と読む。ビルマ文字で *-i* と *-ii* を表記する母音文字は、カレン文字ではそれぞれ *-o* と *-o* に読む。またカレン文字では新たに声調符号を4つも造り出している。カレン族にはキリスト教徒が多い。

(5-2) 南部表音: クメール文字、 タイ(シャム)、ラオス文字

7世紀に入ってクメール文字が登場し、アンコール時代に多量の碑文を残した。そのクメール文字を原形として、13世紀にタイ族は独自の文字体系を造った。その最古の形態がラムカムヘング王碑文である。チェンマイ・ラオス文字や現代シャム文字は、そこから誕生した。

5-2-1 「ラムカムヘング王碑文」 サカ暦1214年(1296)



ラムカムヘング(Ram Khamheng)王の遺徳を称讃したもので、使われている文字をスコタイ文字と呼ぶが、王自らがその文字を創始したと伝えている。タイ語を記録した最古の資料である。字形は角状で母音符号の位置も後代のタイ文字とは異なるが、ほぼ完全に全文が解読されている。原碑はバンコク国立図書館に蔵され、タイ文字創始 700年を記念し、レプリーカの 하나가本学東南アジア研究センターに寄贈された。なお本碑文の偽作説もある。 東南アジア研究センター蔵

5-2-2 Recueil des Inscriptions du Siam, (I. Inscriptions de Sukhodaya), G. Cœdès, 1924, Bangkok Times Press, Bangkok.

(セデス『シャム碑文集』「第1集スコダヤ碑文」) (研究書)

スコタイ王朝時代のラムカムヘング王碑文を始めとする15種の碑文が、ローマ字転写され、フランス語訳を付けて、収められている。

5-2-3 「チェンマイ・ラオス文字経典」 2種

この貝葉本2点は、ランナータイ文字とも呼ばれる、チェンマイを中心とする地域で使われた文字で書かれている。この文字は現在なお寺院で伝承され、八百文字とも近く、やや複雑な組織を具えている。雲南省西双版纳の傣文字は、この文字の発展形である。

5-2-4 「クメール文字仏典」 (写本)

クメール文字には装飾的な書体のムル体文字といわば草書体にあたるチェリエン体文字がある。前者は主としてパーリ語の表記に使われ、後者はクメール語を書く。本仏典はムル体でパーリ語を書き表している。左から右への横書き。

5-2-5 「タイ文字仏典」 仏暦2100年、バンコク (活字本)

南部表音文字で書かれる仏典は、本来貝葉本の体裁をもっていた。貝葉一枚の表裏に文字を書き貼り合わせずに、上下に夾板を置いてその間に挿んでくくった。その貝葉が一つづきの紙に変わり、小刀で刻んだ文字が、近年活字印刷されるようになって、この体裁に変化した。

(6-1) 巴蜀系文字：納西(モン)文字

中国雲南省の西北、麗江一帯に住む納西(なし)族は、独特の象形文字を伝えている。儀式を司る巫師(トンバ)が専有し、一般人は理解できない。言葉の単位をすべて書かないことや、文字の配置などに大きい特徴が見られる。ほかに表音文字(ゴパ文字)も使う。

6-1-1 納西(モン)象形文字

納西族の伝説では、東巴(とんば：巫師)の舞踏は金色の殿様蛙から教わったという。象形文字で書き表すと、このような形になる。蛙のお腹にあるのは、金を素材とした頸かざりを象ったもので、黄金を意味している。納西象形文字は、融通無碍なところに最大の特徴がある。

6-1-2 A ¹Na-²khi—English Encyclopedic Dictionary, two parts, J.F. Rock, 1963, 1972, Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma. (ロック『納西・英百科辞典』) (研究書)

雲南省麗江とその周辺で長期間過ごしたロックは、多くの経典を翻訳し研究したが、本書はそれらの経典から、6千字をはるかに越える納西文字を取り出し解説した著者畢生の大作。古語を含む文学語彙をはじめ、大神名、神名、龍王名、悪魔名、地名のほか儀式で読誦される経典の題目など、納西文化全般について多彩な情報を提供している。付録として写真、図版が付く。上巻(1963)、下巻(1972)共に、著者の没後(1962)刊行された。 文学部蔵

6-1-3 『納西東巴古籍譯注(一)』 雲南省少数民族古籍譯叢第7輯、1986年、雲南民族出版社 (研究書)

納西文字経典にはさまざまな内容がある。この書には、正常な死にかたをしなかった者を祀る宗教儀式で読誦される主な経典3種が収められる。象形文字経典3種と表音文字経典2種、最後の経典は巻上と中が表音文字で、巻下が象形文字で書かれている。原文を一页ごとあげ、東巴の読誦を国際標音文字で書き、逐語訳と通訳を与えていて、興味がつきない。

6-1-4 『納西象形文字譜』 方国瑜 編、和志武 参訂、1981年、雲南人民出版社 (研究書)

納西族の移動から説き、象形字と表音字の創作とその構造を述べる。本文は天象の属をはじめ意味部門別に象形字1340字と、つづいて表音字を収録する。納西文字の実際の使用を示し、東巴経書簡目もついている。

(6-2) 巴蜀系文字：シャバ文字

中国四川省西部の甘洛、石棉の地に住むアルス族には沙巴（シャバ）と呼ぶ巫師がいて、彩色の象形文字資料をもつことが近年発見された。宗教活動を行うシャバたちの用具の一つで、厚紙に書かれたわずかな資料しか残っていない。字形は200字ほどあって、納西象形文字に似る。

6-2-1 『シャバ文暦書』（石棉本）（写真）

この写真はシャバ文字暦書で、横3行縦6線を引き、一葉15駒；表裏30駒が一月の暦になる。中央に十二支の一つを書く。天象の変化、人間の禍福などを占う。

写真 6-2-1 『シャバ文暦書』



(6-3) 巴蜀系文字：彝（い）文字

ロロ文字、爨（さん）文とも呼ばれる。唐代に創作されたと伝えられるが、彝文で書かれた文物が残るのは、宋代以降である。はじめ表意文字で一字を多音節で読んだが、のち日本の仮名のような表音節文字に変わった。貴州及び四川はそれぞれ総計8千字以上あるが、雲南省の字数は少ない。また字形には地方差があらわれている。1975年以降、四川省では涼山の喜徳方言を基に決めた規範彝文が通用する。音節文字で819字ある。

6-3-1 「ロロ文字経典」 明代（？）、25×34cm（写本）

内容は不詳であるが、古いロロ文字で書かれている。縦書きで、行は左から右に移動する。朱色の△印は、句の切れ目を示す。多くの箇所では各句の最後が同じ文字で終わり、韻を踏んでいることがわかる。例えば、㊦はly、㊧はthyと読める。 文学部蔵

6-3-2-1 『爨文叢刻（さんぶんそうこく）』（中央研究院歴史語言研究所專刊之十二）、丁文江 著、1936年、上海商務印書館、上海

主に貴州省大定彝区から収集した「説文（宇宙源流）」「帝王世紀（人類歴史）」「獻酒經（作祭經）」「大解冤經」（上・下）「天路指明」など11種類の彝語経典を収める。はじめの数種の経典には注音符號で読み方を示し、逐語訳をつけている。 文学部蔵

6-3-2-2 『増訂 彝文叢刻』（上中下冊）馬学良 主編、1986年、
四川民族出版社、成都（研究書）

1936年刊行の丁文江『彝文叢刻』を彝語彝文化研究の第一人者馬学良らが改訂、増補したもの。古代彝族の宇宙観、人生観を述べた「説文」を「訓書」と改訳、父子連名の家系を述べる「帝王世紀」を「古史通鑒」とあらためるなど大幅な改訂を行い、12種類の經典を収めた大著。原文には標音、逐語訳、通訳がつけられる。文学部蔵

6-3-3 『彝文《勸善経》譯注・上冊・下冊』 馬学良ほか、1986年、中央民族学院出版社、北京（研究書）

彝文字文献はほとんどが写本であるが、この勸善経原本だけは、珍しく板本で、道家の『太上感應篇』を訳し、その釈義と解説を主な内容とする。本書は各文字ごとに発音と直訳を与え、意識をつけている。豊富な内容は彝族の風俗習慣などの研究に重要な資料を提供する。明代水西羅甸（貴州省にあった）時代の作と考えられている。字体は角味を帯び整った形で明代の金石彝文と似る。原本は今世紀中頃、雲南省武定県で収集され、現在北京図書館に保管される。

6-3-4 『漢彝詞典』 漢彝詞典編譯委員会編譯、1989年、四川民族出版社、成都

『現代漢語詞典』を基準に、各項目に対応する彝語を、規範彝文で与え、ラテン文字表記を添えている。規範彝文を読めない者にも便利で、約5万3千語を収録する。凡例には、少数の単語には、現代語のほかに古語をあげたとあるが、実際には見当らない。1979年に内部発行として『漢彝詞典』が出ている（A5版1149頁）。内容は大きく改訂増補されているが、本書の前身である。

6-3-5 『俣儷（ロロ）譯語の研究』（華夷譯語研究叢書Ⅳ）
西田龍雄 著、1980年、松香堂、京都

本学文学部西田龍雄教授の著書。本書では、故今西春秋博士所蔵の『永寧屬水潦猓譯語』を研究の対象とし、そこに記録される水潦俣儷語を復元し、他の彝語系言語との比較研究を行う。また、種々の資料からロロ文字の系統と発展を論じ、最後に水潦俣儷語・英語の語彙集を索引として付けている。

平成3年度秋期展示会 「東アジアの文字と文献」展示目録

編集	西田 龍雄	〒606-01
	家本 太郎	発行 京都市左京区吉田本町
	谷口 敏夫	京都大学 附属図書館
		電話 075-753-2613
平成3年11月14日発行		FAX 075-753-2629

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎

京都大学附属図書館

1991



表紙写真：「舞踏を教える殿様蛙」解説は、6-1-1 納西(モソ) 象形文字を参照
裏表紙写真：「口口文字経典」解説は、6-3-1を参照